

低炭素社会戦略センターシンポジウム

「低炭素技術をどう社会につなげてゆくか」

日時 平成 26 年 12 月 15 日（月）13:30～17:00

場所 伊藤謝恩ホール（東京大学伊藤国際学術研究センター-B2 階）

開会挨拶

小宮山 宏（低炭素社会戦略センター（LCS）センター長）

本日のシンポジウムのテーマ「技術をどう社会につなげてゆくか」は、LCS が立ち上げ当初から取り組む課題です。技術というのは要素技術がたくさんあり、これらが経済とどうつながるかを論理的に議論しなければなりません。LCS では応用一般均衡モデル（エネルギーや低炭素化に関する施策が日本経済や国民生活にどのような影響があるか、経済理論に則って定量的に評価するモデル）を用いて解析しています。この経済モデルでは、技術の影響をパラメータとして入れてしまいます。そうすると、技術を応用一般均衡モデルで使うパラメータに変換する作業が必要となりますが、それはまだ誰も本格的には取り組んでいません。これが技術と経済とがなかなかリンクしてこない基本的な理由だというのがわれわれの認識で、われわれは技術と社会をつなげるためのモデル構築を行っています。技術側としては、太陽電池や蓄電池など、さまざまな技術をモデル化し、応用一般均衡モデルとつなげるための議論をしています。

折しもペルー・リマで COP20（国連気候変動枠組条約第 20 回締約国会議、2014 年 12 月 1 日～14 日）が終わり、将来への積極的な取り組み姿勢は見られるものの、具体的な際立った成果は出てきませんでした。しかし、ビジョンはかなり形になりつつあり、危機感を共有し始めています。温暖化がイリュージョンだというような話（温暖化懐疑論）をする人は、ごく特殊な人以外には見られなくなりました。ただし、本当に、例えば再生可能エネルギーと省エネルギーで温暖化が解決できるのかという点については、まだビジョンは明確にはなっていません。私の著書『地球持続の技術』（岩波新書）では、2050 年の世界のエネルギー展望について、省エネルギーと再生可能エネルギーでできるということを書きました。そこでは先ほど言ったような応用一般均衡モデルと経済モデルをゆるやかにリンクさせています。

LCS では今、この点についてまだ精緻ではありませんが、大きな漏れがないような形で、きちんとしたモデルを構築して取り組んでおり、ビジョンを示しました。つまり、原子力なしで再生可能エネルギーとエネルギー効率の向上により、今の生活を更に良くして、われわれがやっていける極めて合理的なモデルがあるということ、テクノロジーの面のみならず、コストという経済の面からも提示しました。技術モデルと応用一般均衡モデルをリンクさせて示したわけです。

将来、原子力をどうするのか、再生可能エネルギーを主要な電源にするのかという議論では、再生可能エネルギーを増やしていきたいと、大方の人は思っています。その直感は大分正しく、私もそう思っています。ただ、この次は何がくるのでしょうか。ビジョンがあ

ってなぜできないか。やはりトランジションマネジメント（移行期間のマネジメント）です。特に先進国というのは、今、非常にしっかりした良い経済社会をつくってしまっていて、多分そこが問題の根幹なのです。では、どのようにトランジションをつくっていいのかというのが次に問われる話で、現状では、ビジョンとトランジションを無秩序に議論しているために、社会の中で非常に混乱した議論になってしまっているような気がしています。

われわれ研究機関や大学は、こうした問題に取り組む義務があると思っています。大きな目標は、本日のシンポジウムの題目のとおり、技術を社会の中にどうつなげていくのかということです。ぜひご期待いただくとともに、議論に参加していただきたいというのが心からのお願いです。

以上